



Title	北海道のアウトドアを生かすエコツーリズムと地域振興
Author(s)	敷田, 麻実
Description	四月度経済対策委員会. 2010年4月20日 (火) 13:30-. すみれホテル3階「ヴィオレ」札幌
Citation	北海道経協, 734, 5-6
Issue Date	2010-06-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43111
Type	journal article
File Information	1749hokkaidokeikyo.pdf



北海道のアウトドアを生かす エコツーリズムと地域振興

四月度 経済対策委員会

とき 平成二十二年四月二十日(火)

午後一時三十分

ところ すみれホテル 三階

「ヴィオレ」

議題

北海道のアウトドアを生かす

エコツーリズムと地域振興

北海道大学

観光学高等研究センター教授

敷田 麻実 様

西村委員長の開会挨拶の後、表題による講話をいただいた。

(講話概要)

今日は北海道の豊かな自然を活用し、エコツーリズムやアウトドアで地域振興するお話をさせていただきます。

北海道へ来て、夏の石狩海岸で多くのテントを見かけ、日常の中でアウトドアを楽しんでいると実感しました。自然を楽しむことが生活の一部になっている土地はそう多くはありません。大都市の方は、自然を楽しむというより時間をかけて接しに行くといった感じで、そういう意味では北海道は最高に恵まれたところだと思っています。

アウトドアという地域資源

北海道のアウトドアガイドは二千人ほどで、今、ガイド資格を見直すための委員長として道庁の仕事に携わっています。この資格制度はガイドのレベルアップを図るため、北海道が誇る制度で、それだけアウトドアガイドの

方に責任とプライドがあると言えます。観光客に地域資源を楽しんで頂きたいと常に考えており、単に山を見てきれいだと思うだけでなく、そこにある生態系の不思議なども楽しんで頂きたいのです。

日常生活では、北海道も本州(都市)も同じと錯覚しがちですが、北海道は都会と自然の距離が近く、町からすぐに「自然」に入ることが出来ます。この自然の近さは、本州にはありません。本州の自然は、里山のように人が入った物が基本で、北海道は本場の意味での自然で、これだけで北海道はポジシヨンの優位だと、三年前に来道した私は実感しています。在住の方は、当たり前と感じているでしょうが、これが立派なセールスポイントなので

本州からの適度な距離も観光客にとっては魅力で、離れているからこそ行きたくなくなります。日常生活から離れて違う世界へ入る時間が必要なので

観光としてのエコツーリズム

北海道で団体(十人以上のツアー)旅行客はもう一割しかいません。九割は、家族や仲間との個人旅行です。確かに団体に来てくれたらうれしいので

すが、一割の団体客を探すのは大変ですし、残り九割のお客様に不満足な旅の提供をしてしまうことになりかねません。それより、この九割の多様なお客様に、アウトドアや都市観光といった様々な楽しみ方を提供した方が有効な時代になってきています。

団体旅行参加の割合は、十年前は四割近くありました。また、パッケージツアーも五割近くあったものが、今では二割位に減っています。これは、個人でツアーを作る時代になってきたという事です。業界では、SIT(Special Interest Tour) 目的志向の観光と呼んでいます。

エコツーリズムとは

今までのツアーは消費者がいる都市で作られました。今は目的側でツアーを作り始めています。顧客が近く様子も分かるといふ利点があり、出発地でツアーを組んでも問題もなかったのですが、エコツアーなどで、「礼文島の花が見たい」時、東京ではどのくらい花が咲いているか、どんな時期に咲くかがわからず、良い情報を提供できません。地域側でツアーを作るチャンスが増えたこととなります。もちろん、一般的なツアーは今後もなくなり



北海道の観光を語る北大敷田教授

ないとは思いますが、自然体験などのエコツアーは現地の情報がないと成立しないので、北海道にも勝ち目が出て来たと考えています。

エコツーリズムは環境にやさしい観光と思ってください。最近では低炭素で公共交通機関を利用する旅もあります。が、集客はこれからという感じです。普段は節約して省エネしている方は、せっかくの旅行なので、がまんは勘弁してほしいと考えますが、旅行形態をかえて、車ではなく歩いて楽しむという発想は確実に出て来ています。長崎県でも取り組みがあり「長崎さるく」（さるく＝歩く）というスタイルの観光が評価されています。今まで楽な方法で観光をしていた人に、歩く事が本当の観光体験で、その地域が楽しめるという考え方に転換していただければ、面白い事になります。歩いて回る事で滞在時間が増え、お金を使う機会が増え、また地域の人との交流するチャンスが増えます。ゆっくり歩くと人は頭を使います。目に入った情報を楽しみ、思い出を持ち帰るチャンスも増えるのです。パッケージツアーであちこちを忙しく回っても印象に残りにくく、滞在した事は覚えていても、その他のことはあまり記憶に残っていま

せん。こういうツアー客をたくさん呼んでも幸せでしょうか？北海道の良いところを持ち帰らず、行ったという事だけで終わって欲しくないと思うのです。

エコツーリズムとは、地域の自然を、出来るだけ自然に影響を与えずに楽しんでいただく旅です。一九八〇年頃から世界で受け入れられ、観光客の入らない自然保護したい場所、人に来て欲しくないところが観光資源として注目されました。しかし地域の人々は福祉ではなく、一方で自然保護にはお金がかかり、十分な保護が出来ません。

どの様な生物がいるかなどの調査や保護のための柵の設置などにお金がかかり、このお金を観光から得られたら良いという考えから、エコツーリズムやエコツアーがスタートしました。エコツーリズムは理想や考え方を含んだものを指し、現実の観光体験や旅行サービスがエコツアーと呼ばれています。一緒のようで、ちよつと違います。

観光の光と影

観光の優れている面は、生産した場所消費されるサービスで、わざわざ都市まで運ぶ必要がない。観光客に見せるために、街を綺麗にしたり街並みを揃えるなど、地域資源や人材に投資

ができ、色々な人が楽しく関わることができ、とです。

反面、デメリットもあり、本来、観光地でない所が、ニュースや事件によって勝手に観光地化してしまします。少し前、苫小牧の牛肉偽装事件の会社の前では、観光客が写メを撮るなどの現象が起きました。地域外からの影響を受け、都市の経済などにも左右され、地域が変わってしまう事もあります。

一番重要なのは、サービス業なので「シャドーワーク（ただ働き）」が発生しやすく、度を超えれば、北海道が尽くすだけになってしまふことです。

エコツーリズムによる地域振興

アウトドア活動から地域振興するという事は、そこから経済的な利益を取り出すということです。観光客が来れば経済的なメリットがあるといい、実際に、観光で人が動くとお金も動きまします。

私は経営とはかけ離れた仕事をしており、それ以外の面をお話しします。エコツーリズムですと滞在型になるため、地域の人との交流が生まれます。ここがポイントで、出会いがあると、そこから生まれるものがあります。例として、霧多布湿原のNPO法人霧多

布湿原トラストという団体を取り上げます。この会計士は横浜在住で、たまたま霧多布に来て交流を持ち、会計士を引き受けました。トラストは会計士を、会計士は霧多布湿原に頻繁に行くことができるということで、双方にメリットが生まれました。こうした面白い話が旅の偶然から生まれるので楽しいのです。観光と交流というのは、お金を取るだけでなく、人を動かしかかわるチャンスを作り出すことができ、だから滞在型の観光に切り替え、お客さんと話をし、触れ合う時間を作ればいいのです。

しかし、地域資源は大事にしないとすり減り痛みます。価値を持続するため、観光収益から少し資源へ還元できれば、維持する事も、良くする事もできます。

また観光は、関係者の新しい結びつきを作り出すという面もあります。道の東の標津ではサケでのエコツアーを作り観光客を呼びましたがサケだけでは満足されず、牛などの放牧にも興味を示されました。漁業者と畜産業者とは交流がありませんでしたが、観光客を満足させるための話し合いが始まり、地域の交流がスムーズになってきています。